

地に造営された古墳であることが分かった。古墳は尾根の頂上に造られた全長三七メートルの前方後方墳で、この墳形としては日本海側北端である。尾根を削ってある程度の形を造成した後に、土を盛り上げて墳丘を完成させ、最後に古墳の後方部の頂上を掘り込み、その底に棺を



図79 後方部の調査 中央の細長い窪みに木棺があった
新潟大学考古学研究室提供

その結果、弥生時代後期の高地性集落が廃絶した
治雄氏によって発見されたが、当時は一般に認知されず、昭和五十六年の新潟県教育委員会の分布調査によって再確認された。その後、古墳の全容解明を望む声が上がったのを受けて、昭和五十八年と六十二年に、新潟大学考古学研究室によって学術調査が行われた。



図78 古墳の位置 1,山谷古墳 2,御井戸B遺跡
2万5000分1地形図「角田山」

山谷古墳 西蒲区福井

山谷古墳は西蒲区福井にあり、矢垂川のすぐ近く、角田山南麓から東へ張り出した尾根の先端部にある。標高は約五五メートル、平地との比高は約四三メートルで、古墳からは東に広がる越後平野を一望できる。

山谷古墳は、昭和三十四（一九五九）年、地元在住の藤田



図80 副葬品 左上段、管玉 左下段、ガラス小玉 右、鉄製品



図81 前方部に供えられたと推定される土器 左上の高さ33センチメートル

置いてから再び土で覆い密閉している。棺は半裁した丸太の内側を刳り貫いて作られており、長さ四・八メートル、幅一・四メートルの長大なものである。棺の中には、鉄製品三片と管玉七点、ガラス小玉三四点が副葬品として納められていた。また、古墳の下からは、古墳の上から転落したとみられる壺と甕が見つかった。これらの品物から、古墳時代前期の中ごろ（四世紀中ごろ）に造られた古墳と考えられる。

山谷古墳のある尾根の眼下には、同時代の県内屈指の大集落である御井戸B遺跡がある。ここが古墳に葬られた有力者の生前の居住地であろう。この遺跡からは大量の土器やヒノキ製の梯子、鶏の頭を模した土製品などが出土している。北海道に起源をもつ縄文土器も見られ、広範囲に交流ルートが及んでいたことがうかがえる。

山谷古墳は南側から眺望されるのを意識して造られており、御井戸B遺跡の集落から古墳に通じる道があったと考えられる。山谷古墳の出土品は、現在、市の文化財に指定されており、巻郷土資料館で見ることができる。